

東国紀行

そうぼく

作者: 宗牧(?-1545)

成立: 天文14年(1545)



解題

Keyword

- 織田信秀
- 今川義元
- 北条氏康
- 北条幻庵

室町後期(戦国時代)に連歌師・宗牧が著した紀行。戦乱の時代を背景に連歌が盛んだった地方文化や戦国武将の面影を伝える。

■ 成立

天文14年(1545)3月までの紀行が残されており、作者が同年9月に亡くなっているため、この年の成立と考えられる。

■ 作者

宗牧は谷氏。生年は不詳、越前国一乗谷の出身とする古伝もあるが、定かではない。連歌を宗長、宗碩に学ぶ。連歌師として、師や門弟とともに、生涯に何度も全国各地を旅する。宗碩没後、連歌界の第一人者となり、天文5年(1536)足利將軍家の連歌宗匠に任じられる。自作をまとめた句集のほか、連歌論、作法書、注釈など多くの著作を残しているが、紀行文はこの『東国紀行』だけである。また、近衛家や三条西家などの公家、後北条氏ら大名との交際も深かった。天文14年、下野国佐野(現・栃木県佐野市)で客死した。

■ 内容

宗牧は大永7年(1527)宗長の誘いで駿河まで下り、さらに東国を遊覧しようとしたが、事情が許さず、今回は宿願を果たす旅だった。また、彼は近年中風を病んでおり、東国の温泉での治療も目的としていた。天文13年(1544)9月下旬、京都を出立。宗牧の年齢は不明であるが、20歳に近い息子(後の宗養)を伴っており、自身は既

に老境に達していたと思われる。

10月は近江の石山寺、観音寺城などに滞在、11月に伊勢から那古野(名古屋)の織田信秀をたずね、朝廷からの奉書を渡す。年末に駿河の府中(現・静岡市)に着き、天文14年1月末まで滞在、今川義元にも会っている。その後、念願の熱海での湯治を終え、2月なかば小田原に入り、当主北条氏康、旧知の北条幻庵と交流を深めた。3月初め、鎌倉を経て江戸城に着き、同7日浅草・角田川(隅田川)のほとりで紀行は終わる。神奈川県域では、上記のほか、土肥(湯河原)、真鶴、曾我、こゆるぎ(大磯)、花水川、相模川、砥上が原(藤沢)、江島、鶴岡八幡宮、建長寺、金沢称名寺、神奈川慶雲寺等の地名や社寺が記されている。なお、紀行にはないが、他の史料から、宗牧の旅はこのあと筑波、白河関、そして終焉の地、佐野まで続いたことが知られている。

発句や和歌を随所に挿入した和文体の紀行は、各地での連歌興行を中心に記述がかなり詳しく、宗牧が連歌宗匠として歓迎を受ける名士であったことがうかがわれる。また、連歌興行に伴う酒宴も多く、「大酒」「酩酊」の語が目立つ。その一方、風雅の旅でありながら、美濃の戦に敗れた織田信秀の帰城、駿豆間の今川・北条両軍の対峙、江戸城の出陣準備など、戦国時代の様相が生々しく描かれていることも本書の特色である。

■ 諸 本

古写本を底本にした群書類従本以外に大阪天満宮文庫などに写本があることが知られているが、それらの関係や系統など書誌学的研究はまだ十分には進められていない。



史料本文を読む

<翻刻本>

- ◆ 「東国紀行」(『群書類従』第18輯 紀行部 卷340 [K08/17/1-18])
- ◆ 「東国紀行」(『続帝国文庫 第37編 続々紀行文集』岸上質軒校訂 博文館 1901 [918/8/37])



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 高野修「戦国武将と連歌師：氏康と宗牧をめぐる」(『三浦古文化』(19) 三浦古 文化研究会 1976 [K20.3/3])
- ◆ 金子金治郎「宗牧の紀行」(『連歌師と紀行』金子金治郎著 桜楓社 1990 [911.2/102])